

平成 23 年度富山県「少年の主張」優秀賞受賞作

「私のお爺ちゃん」

滑川市立早月中学校 三年 中田彩香

今からお話するのは、私のお爺ちゃんが体験した戦争の話です。

昭和六年に起きた満州事変。満州を占領した日本は、満蒙開拓団を募集しました。その頃、お爺ちゃんは生まれたばかりでした。一ヶ月が経とうとした頃には、家族三人「満州国」へ移住していました。しかし、貧乏ではありませんでした。むしろ、裕福と言っていいほど、食べ物があり、着る服がありました。お爺ちゃんはその頃のことを「あの時が一番楽しかった。あの五年間は忘れられない。」と夢見るようにうっとり微笑んで言いました。しかし、笑顔がスッと消え、ゆっくりと話し始めました。それは、あまりにも悲惨で辛く、苦しい物語でした。お爺ちゃんは次のように語ってくれました。

「爺ちゃんが六歳になる頃には日中戦争が始まろうとしていて、村にいた男はみんな連れて行かれた。爺ちゃんのお父さんも連れて行かれて、食べ物や着る服がだんだんなくなりました。しまいには栄養不足で病気になった。爺ちゃんもだけど、特に妹がひどくてね。息をするのも大変で、ずっと苦しんでいた。そんな時、日本軍のサイレンが鳴ったんだ。ソ連軍がいっぱいやってきて、どんどん日本人を殺していくんだ。爺ちゃんは怖くて泣くことしかできなかった。病気のため、まだ上手く歩けなかったんだよ。お母さんは困ってね。どうしようもできないから、お母さんは屋根裏に隠れたんだよ。「子供は殺さない」そう思っていたんだらうね。」

お爺ちゃんは少し声のトーンを落とし、遠くを見るような目でそう言いました。「すぐにソ連軍の人が家の中に入って来て、持っていた刀のような物で天井を刺した。何度も、何度も。お母さんが死ぬんじゃないかと思ってずっと泣き叫んでいたら、さっきまで天井を刺していた刀を今度は爺ちゃんに向けて、何か大きな声でしゃべったんだ。その後は背中の中の痛みしか覚えてないね。」

お爺ちゃんの左手がゆっくりと動き、腰の辺りで止まると、
「ここだよ。今も傷痕が残っていると思うよ。」

そう言って見せてくれたその場所には四センチ程の切り傷が痛々しくありました。「それからすぐ家から離れたよ。外に出たら何百人もの日本人が逃げていた。爺ちゃんたち家族もみんなと一緒に逃げた。中国とソ連に見つからないように。」
それから、お爺ちゃんは少しの間黙りこみました。一息つくとまた話し始めました。

「逃げる時はいつも夜なんだ。夜が一番安全でね。でも小さい子が一緒だと、泣いたりして見つかることがよくあったんだ。だから、母親たちが、子供を一つの大きな部屋に入れたんだ。お菓子とかおもちゃとかも一緒にね。そして、外から鍵を閉めた。」

お爺ちゃんの声が一瞬震えたように聞こえました。

「家の周りには草とか藁がたくさん積んであってね、ガソリンが撒かれたんだ。」

私の心臓がドクンと鳴りました。

「誰かが火を付けると火は一気に家を包み込んでね。家の中から聞こえていた子供たちの笑い声は、だんだん小さくなって、外で泣き崩れる母親たちの叫び声だけが響いていたよ。お母さんはなんとか爺ちゃんたち二人を育てようと中国の人と再婚したんだ。そうすると中国軍に狙われなくなるんだよ。それから約三十年間、爺ちゃんは学校にも通わず、働き続けて、子どもができた。彩香のお父さんだよ。そして、ようやく日本に帰ることができたんだよ。話はこれだけだ。今は簡単に言ったけど、もっといろいろなことがあったんだよ。」

そう言うとおじいちゃんは複雑な笑みを浮かべました。話を聞いた後、私の心臓はドクドクと高鳴り続けました。

どんなもっともな理由があったとしても、戦争だけは決して決して許してはいけない! それがお爺ちゃんの話聞いた後、私が強く、強く決意したことでした。